

岩波ホールで「静かなる情熱」を見てきました。主人公のエミリー・ディキンソンに関心がありました。彼女をアメリカ初の女流詩人として、高校 3 年生の英語の教材で扱ったからです。その時の彼女の詩は何だったか記憶がありませんが、詩の印象と彼女の生き方は心の中に、苦しみの一つの形のように、残っていたので、忘れることはありませんでした。今回、「対訳ディキンソン詩集」(亀井俊介編)を求めて、50 篇を読みました。詩は私には無縁の世界なのに…



Emily Dickinson(1830-1886)はアメリカのニュー・イングランドの名家に生まれました。この出自が彼女の人生を外的に支配したことは言うまでもありません。その中で一人の女性として、特に詩を書く人間として生きた姿を映画は十分に語ってくれました。

ニュー・イングランドは信仰の自由を求めたピューリタンが新天地を築いた所ですが、信仰的熱心さが謹厳で潔癖な生活を要求する環境を生み出し、自由な考え方、生き方は批判される風潮がありました。アメリカでも女性はまだ一人前の独立した人間としては生きるのは厳しく、感性鋭いエミリーのような女性は敬遠されました。けれども、時代は奴隷制度に反対し、人間性を求める機運が生じた頃でもありました。

大学創立に関わった教育者の家族の令嬢として生まれ、女性としては高い教育を受けましたが、エミリーは時代に順応する気持ちにはなれませんでした。職業も持たず、結婚もせず、社交も求めず、静かな田舎で、愛する家族と暮らし、彼女の心に響いてくる声に耳を澄まして、正直に生き、詩を書いて過ごしたいと願った女性です。孤独を選びました。寂しさ、厳しさの中に自分を閉じ込めたようにも感じられます。それゆえに、研ぎ澄まされ、鋭く痛烈な面があります。生死を支配する神の存在を信じ、自然の営みの神秘と絶えず、細やかに対話し、別の意味で豊かな日常だったでしょう。

I know that He exists. / Somewhere—in Silence— / He has hid his rare life / From our gross eyes.

分かっている、あの方がちゃんといらっやることは。どこかに一息をひそめて—あの方はたぐいられないのちをかくしたの 私たちの下卑た眼から。

エミリーは感じた世界を彼女なりの個性を持って自由に詩に表しましたが、公表したのは数編で、当然評価されることなく、埋もれたままでした。

I'm Nobody! Who are you? / Are you—Nobody—Too? / Then there's a pair of us? / Don't tell! They'd advertise—you know!

私は誰でもない人! あなたは誰? あなたも—また—誰でもない人? それならわたし達お似合いね? 黙ってて! ばれちゃうわー いいこと!

という一節には、自分を型、色にはめず、自由なただの人とし、またそういう人と共に生きたいと願うエミリーがいます。交際の無いエミリーには、詩が対話であり、世界への窓口でしたが返事は貰えません。

This is my letter to the World / That never wrote to Me— / The simple News that Nature told— / With tender Majesty

これは世界にあてた私の手紙です 私に一度も手紙をくれたことのない世界への— 優しい威厳をもって 自然が語った簡素な便りです—

エミリーは家族の死、友人との別れを哀切の極みと感しましたが、自分の死の瞬間、葬儀、埋葬も想像して、身を置き、楽しんでいるかのようです。問い続けることを止められない、好奇心の持ち主です。

The Heart has many Doors— / I can but knock— / For any sweet “Come in” / Impelled to hark— / Not saddened by repulse / Repast to me / That somewhere, there exists / Supremacy—

心にはたくさんのドアがあります—私にできるのはノックだけ—「おはいり」と優しく言ってもらえないかと 懸命に耳をすませて— 拒絶があっても悲しみはいたしません、私には糧なのです どこかに、至高の方の、いらっやる

ことが— 死後に 1700 編にも及ぶ詩が発見されました。時代がエミリーを閉じ込めたと感じます。詩人の魂の叫びは、エミリーが言っているように、 Exterior—to Time 時間の—外にあるのです—。